

論文要旨

氏名	李 宙垣
タイトル (日英併記)	Sleep status and tongue pressure in patients with obstructive sleep apnea (閉塞性睡眠時無呼吸患者の睡眠状況検査と舌圧低下の検討)
論文の要旨 閉塞性睡眠時無呼吸（OSA）患者は睡眠中に気道が狭窄し，上気道を開存させることが困難であることが報告されている．そこでOSA患者と健常対照者の口腔機能について最大舌圧測定と睡眠状態に関するアンケート調査を行い，比較検討した． 参加者はOSA群29名（男性20人，女性9人，50.76 ± 10.68歳），対照群29名（男性21人，女性8人，47.76 ± 9.96歳）とした．全参加者には鼻疾患の有無について調査を行った．除外基準として矯正治療の既往歴のあるもの，可撤性義歯の適応となる連続した欠損歯を有するものとした．各参加者に睡眠状態に関するアンケートに回答してもらうとともに，舌圧測定器（TPM-02, JMS, 広島）を用いて舌圧を3回測定し，最も高い値を最大舌圧とした． その結果，両群間において睡眠時間や寝付きについて有意差は認めなかったが，OSA群は寝起きと熟睡感の不良を自覚している割合が優位に高かった（$p=0.002$, $p<0.001$）．OSA群は対照群と比較して睡眠中の開口と起床時の口腔乾燥を自覚している割合が有意に高くなった（$p=0.01$, $p<0.001$）．さらに，OSAに関連すると考えられる鼻疾患を有する参加者において比較した結果も同様となった（$p=0.009$, $p=0.002$）．最大舌圧はOSA群の方が対照群と比較して有意に低くなり（$p=0.004$），その傾向は男性で顕著であった（$p=0.0314$）． 以上の結果より，OSA患者ではオトガイ舌筋をはじめとする口腔周囲筋の活動が健常者よりも低いことが示唆された．今後は口腔機能が低下したOSA患者に対し従来通りの口腔内装置による治療だけでなく，筋機能療法を補助療法として取り入れることで，舌筋や上気道拡張筋の筋力を増加させ，上気道を開存させることにより，睡眠中の呼吸機能を改善することに役立つ可能性が示唆された．	